

表彰ということ

くちびるに歌を持て
心に太陽を持て——

85

作家 小檜山 博
絵 網中いづる

以前、ある雑誌に恵まれない境遇ききょうにいる人を紹介する連載記事を書いたときのことである。毎月、福祉施設に五〇〇〇円のおカネを三五年間も送りつづけているという女性に会いに行った。八畳一間の木造アパートに住み新聞配達をしている七〇歳の女性は、ぼくの取材をかたく拒むこばのをやっようお願いした。

彼女は二歳のとき母親が病死、施設にあずけられる。ほかの子にいじめられ、かばってくれる職員のやさしさが身にしみたという。中学を出て働いた紡績工場で二〇歳のとき工場の男と結婚、七年間に三人の女の子が生まれるが、彼女が三〇歳のとき夫は結核で死亡、彼女は夫の少額の退職金で、道ばたでリヤカーを店にしてネクタイを売る。上の子は小学生、あとの二人をリヤカーの横で遊ばせる。

ネクタイは一日に一本くらいしか売れなかった。あるとき中年の女性がきて「これタイ焼き、子どもさんに」と差

し出され涙がほとばしった。冬の雪の日、二人の子どもが空腹と寒さで泣きわめいているとき初老の紳士がきてネクタイを二本買ってくれる。彼の身なりから、とても彼女が売る安物のネクタイを身につける人とは思えなかったという。彼は一言も喋らず釣しゃべり銭もとらずに去って行った。

間もなく彼女は疲労で倒れ、市役所へ行き医療費の助成を頼んだが規則でカネは出せないと言われた。しかしその職員は自分用の牛乳を一本持たせてくれて「力不足でごめん」とあやまったそうだ。

彼女は露店をやめて新聞配達をはじめた。高校へ入った上の子が夜は食堂の茶碗洗いのアルバイトをして二人の

妹の世話をした。ある日、新聞で親のいない子の施設が経営難と知り、彼女は即座に五〇〇〇円を送った。名前は伏せた。家族四人の生活は苦しかったが、自分を助けてくれた人々を思うと苦しいなんて言っていられなかったという。三五年間の毎月の送金を知れ、市が表彰したいと言ってきたとき彼女はきっぱり辞退した。「私は昔、ある人からタイ焼きをいただいたとき決心したんです。一つの手は自分と家族のために、もう一つの手は人様のために使おうと。私のしたことなんか、たいしたことではない。表彰するなら私に牛乳をくれた人やネクタイを買ってくれた人を表彰してください」

彼女の言葉に、ぼくは絶句して天をあおいだ。

